

帰らぬ人へのメッセージ

赤穂一子

秋田県・76歳・無職

Kさん、私は今一人、静かに墓前に花を手向けています。声なきあなたにむかって過ぎし日の想い出を語りかけると、唯涙がこぼれます。あの時、私達は19歳と17歳、純粋な思いに胸がときめき、運命的な出会いでした。

優しいあなたとお逢いし、初めて恋をし、人を愛し愛されるよろこびと幸せを知りました。

Kさん、あなたは21歳で出征して行きました。残された私は再び同じ屋根の下で暮らせる事を信じて、銃後の妻として誇りをもち、心をこめて贈った千人針、3年、5年、無事帰還を祈りつづけたのに、元気な姿のあなたに逢う事はありませんでした。

昭和20年8月11日、敗戦4日前、あなたは24歳の若さで帰らぬ人となりました。

それを知ったのが3年後、小さい白木の箱となって、私の前に帰って来たのです。

唯一枚の写真、肌身離さず心のささえとなっています。

あなたは遠い異国の地で、故郷へ想いをよせ、苦しみの中で息をひきとったかと思

う時、戦死した地を自分の目で、自分の足でたしかめたい。そして思いっきり供養したいと、何十年この夢を見つづけた事でしょう。あれから半世紀余りの年月が流れ、76歳と年を重ねました。24歳と76歳になった今、千人針で二人を結びあい、手を取りあって二人をひきさいた異国の地へ連れて行って下さい。そこへたどりついた時、私の戦後がやっと終わるのです。

戦時中の青春、戦争の悲劇と残酷さを悔やみながら、鎮魂の日々を生きて来ました。今日から「永遠の幸せ」を求め、残る人生を悔いなく生き、一人静かに歩みつづけます。

来世に逢えるを信じ花供えて

一人静かに遺影と語る

一子